

庭訓三娘人

鶴淵初藏編

幻燈圖解

第拾號

護所鶴淵幻燈鋪

幻燈圖解第拾號 緒言

一本舖さまに圖解の第五號に於て家庭教育の說話として
 二人小供の傳を述ぶ該傳をより假設の訓戒たるに過
 ずと雖も幸ひ此の如く余も亦た此の傳を採る者の本懐
 何事かされに如くや余も亦た此の傳を採る者の本懐
 を江湖の批評を名はんと欲す
 一著者此の二人小供の傳を組織するにありて先づ以爲眞さに
 假設せし三人小供の如く國を以て假設の教諭を以て看客
 に興味を興へおほむ如くは傳を編纂する者先づ其の
 事は談人の事には及ば先生曰くなんぞ假設するを要す

茲に三人娘家庭教育の實事談あり子めためは之を説む
 と先生一場の話說三娘娘教育の事跡を述る最も詳なり
 此に於て先生に請ふ圖案を以て其談話を筆記せしむ
 本編十七回の説明をなせむなり
 一本號例に依りて俗談本話を以て之を説くと雖も間々言
 語の直寫の難きものは世間の通俗文体に従ふものあり
 必竟説明の説明者の機轉當座の辨才に任まざるはあり
 れは其妙を覺ゆるまじしを得ず
 明治廿四年辛卯の夏
 編者 記

幻燈圖解第拾號目錄

- 第一圖 三人娘幼年生立の圖
- 第二圖 二人の娘通學の圖
- 第三圖 お竹女中部屋に女大學を讀む圖
- 第四圖 三人の娘うるゝ遊びの圖
- 第五圖 細君繼子を打擲する圖
- 第六圖 女學校運動場の圖
- 第七圖 お竹質屋に奉行する圖
- 第八圖 園遊會に赤縁を結ぶ圖
- 第九圖 お松情夫と出奔の圖
- 第十圖 一葉の離縁狀に二人愁歎の圖
- 第十一圖 お竹主人を看病する圖

幻燈圖解第拾號目錄

- 第一圖 三人娘幼年生立の圖
- 第二圖 二人の娘通學の圖
- 第三圖 お竹女中部屋に女大學を讀む圖
- 第四圖 三人の娘うるゝ遊びの圖
- 第五圖 細君繼子を打擲する圖
- 第六圖 女學校運動場の圖
- 第七圖 お竹質屋に奉行する圖
- 第八圖 園遊會に赤縁を結ぶ圖
- 第九圖 お松情夫と出奔の圖
- 第十圖 一葉の離縁狀に二人愁歎の圖
- 第十一圖 お竹主人を看病する圖

- 第十二圖 細君お針が家を訪ふ圖
 - 第十三圖 お竹夫婦里歸りの圖
 - 第十四圖 龜井戸見合の圖
 - 第十五圖 お竹波戸場にお松を惠む圖
 - 第十六圖 お藤善行應果の圖
 - 第十七圖 お松醜行應果の圖
- 以上

幻燈圖解第拾號

東京 鶴洲初藏編

第一 主人娘幼年生立の圖

茲に現出しました映畫は家庭教育の實驗説を斯く画に致したので、総計十六枚此が發端で御座ります。此の映畫は假に取設けた噺話では御座りませんが、萩村先生が目撃をされ、事實の如く柄をその儘画にいたしましたので、能く心をとめて御覽になれば、大さう利益になります。先づ説明を致して御聞せ申上ります。

此の圖は府下で人々を知られた某氏のおとで、お名前を申ませんが此人は先年高等官を奉職した程の方で學問もわり著述などもあります。辞職の後は或會社より月俸を取りまして其外いろ／＼お事で彼は百圓内外の取入は有ります。廿才の時に田舎の親類より貰つた細君が御座りましたがお松と云娘が生まれまして、産後のひだちがわるく遂に歸らぬ旅に趣れました。其年ある女學校の助教をした婦人を後妻に娶り翌年また女が生まれました。然

るに此主人の姉はいつで御座いましたり(コレヲ)病で死去致し其後姉の夫は郵船會社に雇
ひれ中難船のとき死にましたので姉の娘を養ふ人がありませんから此家へ引取りました
夫ゆへ當家にと(名)のわざと梅松竹に致しました實名の少し憚ります(娘の兒が三人ありま
す前妻の娘のれ松と八才、今の細君の女七才、姉の女七才、此の圖にある通り盆をもつ
て給仕を致して居るは賈い娘のお竹です、お母さんの膝へもたれて居るは實の娘お梅此方
に座て居るのはお松です、サア當家の主人は學者とか紳士とか云る上流社會の人物あり、細
君の女學校の教員も致し教育のよき充分御承知のことされ此の娘は三人とも立派な令
嬢にあるであらふと看客諸君も御思ひあさいませう、私も左様思つて居ります

くはあいなものです、何故あらむ父母たる者がつねに自分の言葉や行跡を手本にさせ朝夕
をつけて少しも不公平のあい様にすれは子供は獨りでよく成ります、世間で悪い子供の出來
るの之自然に出来るのでなく、親がわるくするので御座います此の説の東京感化院長の
高瀬先生が私へお話で御座いました、モシ此の圖にある主人夫婦が公平の考をもつて朝夕

氣をつけて教へみちびき、三人の娘に少しも分け隔を付すなにとも不釣合のあい様にすれ
を必らず立派に成長します、此位の道理は此細君はよく知つて居ります、細君も獨身で居た
ときは随分高尚な教育論などを演説したさうですが此の圖を見れば實子を膝へのせて置
き、先妻の娘と向ふへ座せ、すでに分隔が出来て居ます、加之らす賈い娘のお竹を同席に
御膳をたべさせずに給仕をさせて居る体で御座います、これ何とした事で御座います、
主人どのも傍て見て居ります細君に小言も言ぬ様に見へます、諸君此の處がお考へもので
御座います

第二 二人の娘通學の圖

次の子供が學校へ通ふ處で、美麗に着飾つて居りますのとれ梅で、學校の荷物を持って居るの
はれ松です、れ梅とれ松と同じ娘でまかもれ松は物領娘であります然るに其の着物を見ま
するにどうもれ梅の方が立派でれ松の少し二の町の様で御座います其上れ梅の學校付見ま
で姉に持せるとい如何な次第でありますか先私などの考へで、妹たるれ梅が姉の荷物を
持てゆくべき筈で、着物なども先妻の子の嫡女に似まつ美しいのを着せ自分の産だ女の少

其次な衣服でよろろふと思はれます、また貴娘の竹も夫の爲には一人の姉が産た子まか
も母親に死別れ父も變死して頼りのない子でありませう然らむ一際憫察を加へて吾子供と
同じく學校へも通はせ、衣服なども余り見苦からぬ様にせねば義理の濟ぬ筈で御座います、
ソレに御覽なさいお竹の下女同様に襟かけに成て雑巾を掛て居ます、此の父も母もない娘
の學校へもやられぬと見へます、これを家庭の教育と言ませうか、主人どのもいかに細君
に任せて置くと言ふが是では餘り不公平であらふと思ひます、諸君もよく注意して御
覽下さい此後此三人の成長する模様と其の教育の結果に充分の御注意を願ひます、念のた
めに一言を添えますが此圖はお松は十一才お梅お竹と十才であります

第三 ね竹女中部屋に女大學を讀む圖

此の圖は女中部屋の處で此に年齢五十計りの女が居ますこれは日々雇はれて來ね針で御座
います菓子を買て參つて竹にやります、また女大學の古本を持て來てこれもお竹に贈りま
した、御覽の通りお竹は古い机にかゝつて習字をして居ます、學校へもやらず女中部屋で
習字をさせて置きますのを針も可憫だと思ひまして折々菓子などをやりまた本などもや

る事と見へます、此女中の名はお糸と言ひして昔の徳川家のお家人某の娘で夫の目付一色
某の家來で有りましたが維新の際宇都宮で戦死をいたし其のちの後家で暮して居りました
が少くも文字もあり心得方も確乎した女で御座いますからお竹を愛まして折々は女大學を
教へます、後には内々でいろ／＼お本を持て來て讀せたと申ことでお竹が至極穩厚目叔父
叔母の命を少し拒ます身を卑下して何事もハイ／＼と立働くやうに成りました此のお糸
のれ陸であると申します、諺に捨る神あれば助る神とやら申すと此ことで世間に鬼ばない
と云り理りて御座います、其もね竹が素直よて人に可愛がられる質でありませから他人の
れ糸までが世話をする氣にありません、おんは薄命お娘でも根性がわるく心立も曲くねつて
居りましたなら誰も世話の仕人はありませんまい人は心掛が大切に御座います、さて細君と
何を致して居りますう今晝寢して居ります、旦那が留守にと晝寢をするで見へます、餘り
心得かたの良い奥様とは見へません

○第四 三人の娘かるた遊びの圖

さて前よりは二三年たちました、是は正月で家内打よりて遊戯で居りますが、さう

の子供が余り睦しくないので、此圖を御覽なされと直わかります、おれとケ様で御座いますね梅が三人で「トランプ」を致させると言だしましたスルとね松のハイ致させうと、直ぐ賛成いたした處がね竹は元來一度も左様お遊びを志た事が有ませむから「私は存じませんから止ませう」と申すとね松はね饒舌で少し根性がわるい方ですから「アラね竹さん知らないなんて嘘だワ早くねやりませうヨ」「私は眞實にそんなじやせんと言ふ」のも聞入れずね梅もすいめませす傍ら細君が少し癪癪めいた聲で「ね竹やねまへ意地がわるい子そんな事を言すにね娘さんと一處にねやりヨ」と號令を掛ましたね竹の余儀なく札を手にとりましたが少しも知りませんから二人も面白く有ませんスルとね梅が「そんならね竹さんの知て居る歌がるた」を致さう」と云事にあり三人で歌がるたに取掛りますとね梅やね松は百人一首を一向に知りません細君が上の句をよむでも二人とも直ぐ手が出ませんね竹の内々ね針に教へられて居たと見へまして百人一首を暗記して居まして手早く取すめで細君も張力が抜け二人も不平でとう／＼止て仕舞ました、細君が吾娘が勝たなら御褒美に味の菓子をやるふと思つて持出して置ましたが是も的が外れました、平日の模様此の有様で大てい

御推察なさい、ですから金を掛て教育を致しても導き方がわるいと立派な人間は出来ませぬね竹は一日も學校へいやらす碌々本も買ていやりませんがいつの間にか百人一首の和歌を暗記して居ります、學校へ通ふ二人はトランプは上手でも歌がるたは存じません、同じ遊戯でも大さうに品格が進つて居ります、さて三人の性質は如何と云ことを御覽に入れね心をりません右の如き育て方をしたなら如何なる性質の娘になるで云ふと云ことの大切なる問題で御座いませう、その様は次圖に御目に掛ます

第五 細君繼子を打擲する圖

是と御覽の通り一人の娘が細君に打擲されて居ります、三人の内誰で御座いませう、また中間へ立入て細君をさだめて居る娘もあります、また一人を琴を弾て居る、おれはケ様な譯ですお梅は細君が極く可愛かりまして琴を學はせたり立花茶の湯なども習はせませう、お松にも習はせました何が何となく二人の娘に甲乙を立てまして同じ修業をさせるにもお梅二三ヶ月も先へやりまして琴の二三曲も覺へた頃お松を習ひにやりませう、お梅が遺ひの服紗で茶を習はせたり、花もお梅よりは一段づゝ跡巡りになる様にいたしませう

と追々「ヒガミ」根性と云ふ一種の癖が出まして何事もお梅を羨みます其が原因で今日のお梅が淺草へゆくからお松もおいでなさいと細君が言ても私の御免を蒙りますなぞと「シヨゲ」さまお梅とならむで歩行は着物が悪いから耻かしいなぞと心で思つて居る様な不平もありません、此の圖は一日近日お客をするについてお父さまがお梅とお松に何か弾じさせたい下稽古をして借がよいと仰やるから二人ともお潔なさいと言ますと妾の御免を蒙りますと例の癖を出しました、ナせお前は其様なことをお言だと呵りますと鼻でブンとわしらつた顔付つね〜繼子だから妾をかり憎がると思つて居ますから少の事にも其顔色が出る細君も素直でないお松も少し曲てるので「ヨ〜」憎むどうでも言ことをお聞であいか下責ると妾と爪が損れてありませんものとキツパリ断りました此一言で細君も胸へギクリ響ました其は外で有ません琴爪が破損てもいつもお梅に新しい善い爪を買てやり其れ古をね松にやりますいつでも碌々のやりませんからお松と新らしいのを買て下さいと二三度言ましたを買て與へません其ゆへ今ぞ其事を以て琴を断る時節と思ひまして斯な皮肉な挨拶に及びましたスルと細君腹を立まして煙管で散々打ますお竹へ飛出して細君を押へ双方を

勸解するのをお梅の知つて居ても平氣でケロリカンと琴を弾て居ます女中のまた初たと言ふ顔つきで舌をペロリと出して居ます、さて三人の模様年を重ねて追々性質が變じて参ります、お梅は高ぶつた氣風で姉を姉とも思はずさりとて口の余り利舌腹で人を卑下で居る様も氣質細君が學校に居た時の風も似て居ます、お松は多辨りな上根性がわるく他が美麗ものでも着れを只だ何となく浦山しく、お梅に負るが悔しい〜と云ふ氣が常に離れません、細君とお梅と話をすれば直ぐ傍聞をします此一事で大ていお分りに成りませふ、ね竹の父も母もあく頼みに思ふ人もない處を叔父に世話をされて居る身なれと何事も望みと云ものは持せせん只だ此家の人に憎まれぬ様に朝から晩まで「ハイ〜」と立働居ますその癖決して馬鹿ではない客が参りて取次ぎをしても込入た口上を立派に取次ぎますナカ〜確乎した處がゐると見へます

第六 女學校運動場の圖

此の處は三四年過まして主人が會社の要向で支那へ出立致しました不在の中お松をゐる女學校の寄宿舎へ入りました處で御座います、御覽の通り二三人の女學生が夜中運動場に納涼

居ますソコへ書生が二三人来て何か戯れて居る体で御座います何故へケ様な寄宿舎へ入ま
したかど聞いて見ますると主人の友人が一日忠告を言ました君の細君に實子があるのよ先妻
の娘までを世話をさせるはよくない寧先妻の娘さんは學校へ預けるがよいと諷諭しました
是の實際今の細君が不公平な教育をされると云ことを世間でも知りまして友人中の評判にも
なりましたのでソコで忠告を言ました、が主人も馬鹿でない人ゆへ成程と思つて學校へ頼
みました、されどお松がモウ十四五に成つてからです實は最う遅いので繼母の仕向で散々
根性がわるく成つてから學校へ入れました故朋友にも余り可愛がられませんが、其上女學校
中には余り風儀がよくないものがあるもので年頃の女生徒が寄と直ぐ男の噂です此の圖の通
り男が来て何か言て居ます女生徒は皆嬉しがつて居ます、此の体でい連も品行方正には成
ますまい男が今百合の花を折て来て垣の外から出しますのをお松が受取て居ます、此の男
も不埒千万な者です修業中の身で何用あつて女生徒の遊ぶで居る處へやつて来て花などを
遺りますかまた此女學校も取締向の一向立ぬと見へます、諸君も新聞上で女生徒の品行
と云事を時々御聽になりませう、只今でも監督の不完全な女學校にの動もすれば醜聞が漏
れます、されどお松も不品行な女生徒の仲間入りを致さねばよいと思ふ場合に臨みまし
た、此おどの主人が四年の間上海へ參て居る中の事で御座いました此間お梅の母の許に
教育をして居ります

第七 お竹質屋に奉公する圖

是はお竹の身事に移ります主人が支那へ參る時に細君に申すに「お松のお前のために義利
ある子なれば學校へ入れて教育して下さい」と頼みお竹は宅へ置いて裁縫の稽古をおさせなさ
いモシ宅も閑にあるから一人つゝも人を減す方がよいと思ふなら二三年奉公に出しても
よい奉公と云ことは皆常人の修業になる事だから彼がためにも善事ですト申置ました其故
出立の後奉公口を捜しましたが是ぞと思ふ處もありません細君も「お竹の體柔女ではある
し別に邪摩にもならぬうら奉公口がなく宅に置てもよいと思つて置ました、然るに前回
よ出ました針の糸が竹が奉公に出されると聞いてあの様に穩厚な性質の女をなせ邪摩
まするであろふ奉公と言ふものは慈悲のある主人を取れて心よければ無慈悲の主人もど
ると苦しい思ひをせぬをあらぬ、お竹の爲なれば能い奉公口をさがして遣たいと出入場の

商家や官員あぞを聞て見ますと神田の質屋で仲働きの女中か欲いと云ので早速れ糸が来て細君に話しました、れ竹が出て見たいと思ふならを出してよいと云、れ竹のいづれでも宜敷御座いますと云、れ糸がれ竹の出世の端になるかも知れせん質屋さんの且那もれ家内さんも結構な方ですと勧めまして遂に十四の秋奉公に出ました、質屋の主人は源兵衛と云て身代は中々堅固で忤が二人ありまして一人は別家して居ます二男は某商會へ奉公して居る源兵衛はホンの隠居の慰半分に質世をして居る迄にて朝夕本などを讀んで樂んで居ます女房も極く氣のやさしい人で一人の女中と店に居る番頭丁稚あぞをよく面倒を見て使ひます、ケ様な處へ參つたのでお竹も大きに氣が安りました能く主人夫婦の指圖をうけて立働き少も陰陽なしに勤めますから是のよい女中を置た身柄も卑くないと聞たが言葉つかい、舉動いかにもまどやかではよい女中だと夫婦が内々喜んで居ます、お竹も此に居る中に夜は縫針を必至と習います、また閑があれを筆術早學などを買てをいて筆を習います後には奇特な心掛だ已も閑だから時々教へてやるふなどと主人が讀書や筆術など教へます實に不幸中の幸福といふもので御座います

第八 園遊會に赤縁を結ぶ圖

此の圖は品川の某貴顯の庭園で御座います大きな樹木の下に洋服を着た若い男が居ます是は華族の某君の二男で外務省の官員です其傍に居るのはお梅嬢で何を話して居ますやら分りませんが跡で聞て見ますと此の官員がお梅嬢の容貌の高尙所がよいと言て是非細君に去たいと云こととでありました其頃の父も居りませんから何れ歸朝の上で御挨拶申上せうと表向は断りましたが當人同志は親しく交際をまて居まして何の蚊のど名をつけて逢ます母親も彼の方は月給百圓程もとり其上華族の御二男だから聲にしても申分もないと内々喜んで居ります其中主人の上海より歸りましたか四年も外國に居ました故歸朝の後は中々多忙で日々會社の用向が多ふ御座ますから二三ヶ月と娘の身の上を相談する處でと有ません、其後細君がお梅の聲に云々の方を貰つては如何で御座いませうと云問題を出しませと主人は俄に心付ましたお松の嫡女である其嫡女をさし置てお梅に聲を貰ふ事の世間へ對して濟ぬ譯だお松に聲を迎へて此家を譲るべきが至當であると言出ししましたと細君甚だ不平で種々面倒な紛儀が起つて參りましたから主人も斯う家内揉がしては困る例へお松に聲を

迎へても妻が不同意で家の治りがつかぬとどうもお梅に智をさる事に致し其旨を挨拶に及びますと先方では智にゆく譯より参らぬ此方へ貰いたいと云ふとに成ました其で困ります跡をさる娘で御座いますから嫁にやることは出来ませんと云ふと今度はお梅が承知しません妾のお松さんを差置て智をさるのは嫌で御座いますと云出しナカク義理堅い申分で御座いますすが實と生方と内々約束があるので是迄我儘に成長した癖が増長して勝手に亭主を極て仕舞ました母親も娘の言處無理ではないと思ひましたか今度と議論が一變しまししてお松は義理ある娘で御座いますから彼に此家をやりましてお梅の嫁にやりませふと出しました理屈はどうでもなります自分勝手の方へ道理をつけて遂にお梅を官員どの許へ嫁をやりましたお梅が十七の夏で御座います、さて此ときはお松はまだ學校に居りましたが余り評判がよくあいの事で御座います

第九 お松情夫と出奔の圖

さてまた此に一ツのお話が御座います、此に寫し出した處で大概御推察が出来ませふが、お梅が嫁に参りましたので跡々と言ても面倒だから此際にお松を引取て相應な智があらむ

貴事事に云やうと云相談で先づお松をよんで話しますと妾のお智などの貰せんとキツぱりと断ります、父も母も呆れましてモウ十八にもお成ではあいかあせ其様なおとを言ますと段々説得しても一向聞入れません、其通り父母の命を背くならば勝手にするがよいと大さ立腹しましたのでお松も我を折りまして其あらお智を迎いますそれに就ては妾が氣に入た方を願いますと處女に似合ぬ口上、父も生意氣に成たおと思ひましたか當人が氣に入らぬ者を貰ても夫婦の折合が悪かるふ身分の確とした相應の資産のある者なら心随分貰つてやりませうと申しますとお松と向かモギク致しましたがさすがに其場で誰某をど名を指す譯にも参りませんで其日は學校に歸りましたが翌日校長の妹で安子と云助教みた様な資格の女が來まして本郷の田町に下宿をして居る原田と云書生を智に貰つて呉と云お松の情願を代言に参つたのです、父は之を聞まして何れ原田の身上を能く探た上で取極てよければ更めて原田の兩親へ掛合ふ事にしやうと挨拶して歸りましたが其後原田と云書生を探索して見ますと大の遊蕩家で生れは越後とやら學問も出來ず、資産もあし政談演説の假聲や落語の真似などは至極上手あれど是ぞと言て勉強した事のない人間だと聞まして以の

外に驚き早々安子を呼で断り、あんな書生と交際でもえて居る様では飛んだ間違が出来
 であるふ早く宅へ呼戻すがよいと次の日お松をよびに遣りますと學校の返事に昨夜出たま
 ま未だお歸りがありません度々實家へゆくと仰つて泊掛にお出掛になる事が有ますから昨
 夜もお宅かど存じて居りましたとのこと父は大きに驚き以の外の不行跡と憤れハ繼母と
 シレ御覽なさいと言顔で濟し切て居る、處々をさがして見ますと昨夜原田と云書生と二人
 で上野發の終列車で何處ぞへ走つたと云迄は分りました、此の圖はお松と原田が出奔の様
 を寫しましたのでホンのお慰みで御座います

第十 一葉の離縁狀二人愁歎の圖

此の圖は一人の婦人が泣て居ます、その傍に母親が是も同じく泣て居ます是は何とした譯
 で御座います、諸君御判断下さい……未だお分りに成りませぬか是は則ちお梅嬢ですな
 せ泣ますか夫が死たので御座います、其でなくハ離縁にでも成たので御座います、い
 つれ善事ではありませぬ、聞て見ました處果して離縁に成りました、其子細を尋ねます
 と夫となられた華族の御二男と妾腹の子で其お妾は今も猶存命で此二男との同居して居

ります然るに此のお妾年と五十許りで昔ハ柳橋の藝者ださうで御座いますナカノ利口
 な人で口も八丁、手も八丁一を聞て十を知り、眼で見ても鼻へぬける程の方で是から何から
 何まで行居ます姑女と言ハさんば性質善良人でも嫁のためには余りよい物でないとい聞ま
 した此の姑は今申通りのゑらい人物ゆへお梅がお嫁に来た時より此女余程我儘に成長
 ものと見透しまして吾子の妻にするにはこんな人物でないけい今から充分に教育してや
 ろふと其より掃除の仕様から衣服の出入、女中の指圖、などに至る迄細に教へてヤレコレ
 と指圖をします固より悪氣でするので有ませんがお梅の何分姑が八釜しくて耐りません
 からいろくくに抱けて宅へ参り骨休めを致します、夕様に度々歸りますから姑の方でも氣
 まづく思ひまして折台も能はありませぬ其内二男との歳は若し細君が三日も四日も續け
 て實家へ行た晩に随分遊びに出掛ますから終に夫婦の間も思ひの外疎くなりましてアン
 ち女はよしませぬと言出すと姑ののがお前が然お言だから申すがお梅の實は裁縫も尋常
 には出来ず、小言を申せぬ直顔色をわくしてツンツンと致しあれでハ子供が出来ても教
 育などの出来ませぬから成事なら今の間に何とか致す方が双方の爲であるふとの賛成と

うゝ離縁と決着いたしました實家へ歸て居る處へ媒人が來て離縁の相談極り御覽の如く離縁狀を前へならべて大愁歎と云ふ幕で御座ります是れは必竟母親が可愛がり過ぎて我儘を增長させた結果で御座います少しも不思議は御座いません之を見ても子供の育法ほど大切なもの御座ません、さて次回の繪を御覽に入ります

第十一 お竹主人を看病せる圖

此の處にお竹が奉公中の有様で御座います、お竹は大層主人に氣に入られました最早四年ほど勤めまして家族同様に扱はれる様になりました其も必竟當人の心懸がよいからで御座いますせうが其には少し譯も御座いますお竹が奉公に參つた翌年此家の細君は血寸白と云病氣で特の外に腦みしました前後八十日許りどツと床に就て少しも枕はあがらず其に看病をすると言ても外に頼母しい者もありませんで男の何人あつても看病は下手でいけませんソコへお竹が心付きまして夜も晝も傍へ付きりて至極深切に看病をいたしナカク實の娘でも迎も斯は出來まいと思ふほど能く世話をしました、細君も涙を流して嬉しがりましたお前が此の深切なたとへ死でも忘れませんと申た位です、然るに幸にして追々病氣が全快致

しましたから其より實の娘の如くに可愛がります、お竹の叔父が歸朝の節も暇を取て歸るやうにと申こしましたたが源兵衛ナカク暇を出さ處では有ませんとらう四年は必勤めます中に當家の跡を繼ぐべき金之助と云息子が米國へ商業の見習にゆきたいと云ふとに成イヨク出立と云と源兵衛夫婦よりお竹に私の家の嫁に成ては呉まいかと云内々の相談がありました大体の考なら直ぐ喜んで承知する處をお竹はナカク諸と言せせん妾の父も母もない身で御座います殊に財産と言ては少しも御座ませんのに御當家の様な立派な御身上の嫁にあるなどい不釣合な事で御座います牛の牛連と申壁もありませんれば妾は御免を蒙りますと断りました身の分限を知るとやらで感心で御座います主人より兩三度も頻りに申ましたが一向に聞入れません、ソコでお竹はつと考へ出しまして近頃お梅さんが歸てお在だと云がお梅さんなら似合のしい御婚禮であるふと密と叔父の家へまへりお梅の母に話すと大喜びで御座いますとどうぞお前から下話を一してお呉大概極つた處で表向の話をしませうと言こになりお竹より源兵衛夫婦に話しますとお梅さんでもお花さんでも御免とお前を是非と思つて居るから早く色よい返事をして下さいと言れましてお竹の大き

に閉口いたしました、何よ致せ結構な話で、御座いませんか

第十二 細君お針が家を訪ふ圖

さて次の画は一人の御新造が進物をもつてむさくるしい長家へ参られた處で御座います、此の家はお竹の爲に、多年深切に志ましたお針のお糸が住家です、此のお客、則ちお梅の母親で御座います、前回に申上ました通りお竹が参つてお梅さんを質屋さんへお嫁にお遣しなされては如何で御座いますと申したので大喜びにてお竹へ媒灼の下話を頼みました、其後お竹より一向に返事もありませんから待遠しく思ひまして夫にも相談の上お糸の質屋と懇意との事なれを彼を頼むで話したなら縁談も纏るであろうと大きな菓子折を車夫に持せてお糸の家によつて参りましたツイど一度も來た事のない奥様が來車ですからお糸は驚きまして茶を入れたり、何んかして大騒ぎをしましたソコで段々と依頼筋を話しますとお糸は腹の中でナンダ彼様我儘娘が商人の家へいつて勤るものか迎らだめだ質屋ではお竹さんをお嫁のつもりだ此のお糸もお竹さんを彼の家へ納めねば憚りながら永い年月世話をした甲斐がないお梅の媒灼なんぞは眞免だ腹の中で高く括て居ます、眞坂さうも言れ

ませんからヲヤ、左様で御座いますか直參て話をいたして見ませうと程よく挨拶に及びました、其から次の日質屋へ参つてお梅の話をするかと思ひ、そんな事は少しも言が、お竹を一間へ招ぎ頻りに常家の嫁になれと言ふことを勧めます、お竹も義理に迫つて最早嫌と言ふれぬ場合となりました叔父が承知ならむと言ふ迄の返事で主人夫婦も大喜びお糸が申せに此縁談とナカ、尋常では成就ませぬお梅から遣るが、お竹とやらぬ杯と意地の悪い事を言ませふから媒灼と確と致した方をお頼みなさいと云ので源兵衛も様々に考へました、幸いな竹の叔父が勤めて居る會社の社長を懇意ではあると取引上關係のあつた事もあれば、彼の人を頼む事に志やうと直ぐ社長に話しますと其は容易の事だ、其日に竹の叔父に話しました、實はお梅を頼むは付たが社長の言ふ事ではありお竹の爲に結構の事なればよろしい、遣ませふと早速承諾しました之を聞てお梅の母親は大さう腹を立まして親子で散々不平を鳴しました、會社の應接所で社長と源兵衛と三人で取極ました事ゆへモウいくら胸を立てる仕様がありません

第十三 ね竹夫婦里歸りの圖

此の處へ寫しましたはイヨ／＼結婚の約束が整へまして首尾よく興入となり其後若夫婦が叔父の家へ参りました處で寔にお目出たいたので御座いますかね梅も母親も竹が立派な細君に成つて聲どもに参つたのを見るにつけても腹の中は嫉妬の念がヨミ上て自から顔色にも現れますね梅は病氣を號して一間へ這入て寢て仕舞ました、ね竹も程よくして金之助共々歸りましたが其晩は家内が何となく可忌工合で細君は不平な顔、お梅は濟こんで居る、主人は苦々しい顔をして得る、女中どもは陰てクス／＼笑て居ると云甚だ不体裁を極めさせ、さて其のち金之助は米國へ赴きました故夫の不在には家を明てはならぬとね竹は一切叔父の家へも参らず舅と姑とに能仕へて家事向をも万事取扱ひ奉公人の面倒をもよく見ますので家内とますます／＼繁昌して一家和合と云塩梅で御座います

第十四 龜井戸見合の圖

此の圖は梅の身事で御座いますがお梅も女振りがよいので間もなくまた私立學校の教員に見染られました廿才の春に嫁にまひりまえた、今度おそ能く辛抱してお災と母も頼む様よ申しますお梅も氣の毒に思ひましたろう参る時と石へ噛付てなりとも夫の家と出まじと

心掛けて参つた處が婚禮の次の日歸て参りシク／＼泣て居ます、母も心配しましてどうした事と聞いて見ますと寫眞で見た聲さまとの違ひますわんな人と終身運添ふから死で仕舞ますと身を振はして泣ます段々様子を聞いて見るに學問は出来るがいかにも色が黒く眼がピカピカ光て愛相の赤い顔です寫眞では色合の分らず眼の光も寫あかつたものと見へます元來此の教員の學問は余程出來て私立校の教員にと過たりと言ふ、程の人材でありませぬお梅の只男振りがよければ心其でよいと思ひますのが第一の心得違で終身の苦樂を同ふする夫で御座いますすなんば男振りがよくても身に才藝がなくて一家の維持、子孫の教育二ツあがら出來る事ではありませぬ、其處へ心が付ぬ位では人の母にはなれぬ筈、母親たる者よく／＼合點せ給ひなりますまい、どう／＼此の結婚も僅か一日で離縁沙汰です、其後また父が出勤する會社員が是非貰い度と申のでね梅に話しますと今度は見合をしたと言いますので龜井戸で見合をするそ双方とも氣に入りました第一男振りがよいので直ぐ結婚になり聞もなく子供が出来ました、此圖は梅が龜井戸で見合の場で聲どとの扇を半分開てまるで落語家見たやうな半可通で御座います、學問もあし、資産も澤山となし、口前がよいのと取廻し

のよいだけで是ぞと云人物では御座いません先の學者の方がいくら頼母しいか知れませぬ

第十五 お竹波戸場にね松を恵ぐ圖

此圖とね竹の夫金之助が二年目で米國より歸朝の處でお竹も舅源兵衛夫婦も出迎に横濱まで参りました處で只今向ふから船が着ます、然るに波戸場の入口に年の頃二十三の女が子供を背負て小な風呂敷を抱て立て居ますのをお竹が見ると是はお松で御座いますから大きに驚いて、ヲヤ／＼ね松さんでお在るさいます御座います御座います御座いますト聲掛られ、お松ハハツと驚て逃さうと致したが間に合いません、寔にどうもお耻しい事だと涙を浮て來歴を話します、原田と云書生と逃亡いたしましたが固より薄情な男ですから前橋と云處で男に捨られましたして其のち茶屋女と云者にありて浮氣な業をして居ります中に監獄の看守とやらを勤る／＼と心やすくあり其人の女房にありて昨年上京し一二度父へ詫を致しましたが一向に聞入れません是も母が彼の通りで御座いますからと自分の非を棚へ上て繼母を悪く言まを、其のち夫が當地の税關へ轉じましたので妾も當地に居ります月給は六圓ほど取ると聞てお竹と憫然と思ひ懐るより一圓札三枚出してお松に遺ましと妾

の宅へ尋ねてお出なさいお詫の叶ふ様にして上ませうと深切に申て分袂しました、其後いづれ尋ねて参つたので有ませう、サテ金之助歸朝の後ある銀行の支配人に撰擧されました只今でも立派な生活をする様にありました

第十六 善行應果の圖

是ハズツト年數も経まゝた處で此に立派な奥様が美しい令嬢に裁縫を教へて居ります其傍に居るの姑です、此の誰が身の上で御座いませう、ね梅でせうか、お松でせうかお梅は一人の夫を嫌つて學問も才氣もない鼻の先で扇をパチ／＼やらかす半可通又惚て夫婦にありましたから、どうで行末之苦しい思ひを致そに相違ありません、またお松は前にね見せ申た様な慕ない有様に陥つて居りますナカ／＼浮ぶ瀬と御座いませぬ、此へ寫つて居りますのは勿論お竹が榮華の身の上で御座いませう、年齢も三十五六になりました子供も四人出來ました物領は娘で此に裁縫の稽古をして居ります美麗な織物を縫て居ますが帯で御座いませうかいつれ大したお金の出る品物と見受られます次は男の子で十四才に成ります當時某の熱へ這入て居ります、三番目も男で小學校へ通ひませぬ、次は女で未だ三歳ですが乳母が

連て幼稚園へ参つて居るのです、此の家内の有様を見ましてもナカ／＼立派なことで二万や三万の身代ではない様に見えます、だん／＼尋ねて見ますとね竹の夫金之助は銀行の支配人を多年勤めて銀行の爲に大さう力を盡し最初十五万圓の銀行であつたを二十五万圓として其上積立金の三十万圓も出来經濟社會では非常に信用を得る様にありましたが是も金之助が米國の銀行で實際に研究して歸つた結果であるとして株主は大きに喜むで頭取が老年で退役した跡へ金之助を頭取に直したれば同行はますます／＼繁昌して有名な銀行にありましたソコで金之助の兩親が存命中に家屋を普請して喜ぶ顔が見たいとね竹と相談して駿河臺で二千坪の地面を買入れ西洋館日本造取交で百三十坪ほどの新築を致したと申さどで女中も仲働小間使彼是五人、下男書生車夫五六人もありまして安ばい華族などは遠く及ばぬ榮華で御座います、されどお竹は心掛が堅固で假にも奢侈がましき事なく多くの人を遣ひながらも自分で裁縫をいたし娘にも教へて居ります此の心あつて初めて立身出世が出来るのです

第十七

醜行應果の圖

つぎはまたお松が身の上をお目に掛まきので、「明心寶鏡」と云書に善を積む善に逢ひ、惡をつめハ惡に逢ふ子細に思量すれば天地は錯らず、善惡到頭遂に報ひ有り」とあるが如く悪い事して善い事に出つ喰せやうとしても決していけません、お松の有様を御覽ささい此に洗濯をして居て長屋の喧アと饒舌て居るのはお松が娘です十六七にありませう前圖お竹の娘とは月と泥龜ほどの相違です、お松の様子を聞きますに先年までは夫は監獄の小役人でありましたが免職に成て其後は再勤も出来ず余儀なく或學校の小使に住まみましたが、一時輕い「てうちふす」熱又罹り三ヶ月ほど煩つて小使も免職となり只今では辻車を挽て居ると云事です自分は裁縫もよくと出来ませんうら賃仕事もする譯もゆかず娘とても余り容貌がよくないので茶屋の女中にもおれず特にお松の子ですから教育はなしホンの下等社會にあつて終身浮たつ瀬は見へません、是でも立派な紳士の娘でありましたのが心掛一ツにこんな有様に陥ります、大切なるを教育で御座います

幻燈圖解第拾號 畢

廣告

新工夫
便利

寫真器械

壹組 金拾五圓

(舶來レンズ一個、暗箱、取粹兩面取り六個、三ツ足、共)

此器械ハ所謂ル速寫用ナリ山間溪谷何レニ至ルモ一ト度準備攜帶セバ容易ニ十二種ノ寫真ヲ成シ得ラル

同藥品及使用器具

式一 壹組 金六圓五十錢

(其種十五一ト箱詰トナリテ之レ又攜帶用トナレリ)

鶴淵初藏編

寫真獨習案内

一部 金拾五錢

其方ヲ簡易最モ明細ニ寫シ方並ニ藥劑配量面板現象ノ心得及仕方器具ノ取り扱其他燒付ケ仕揚方心得及取り扱等一見シテ其術ヲ容易ニ了得スベキノ良書ナリ蓋シ普通平話的ニシテ尙且ツ各要所ニハ圖面ヲ編入セルカ故ニ姉女幼童ト雖共容易ニ了解シ得ラルベシ但シ寫真器械ヲ購入セラル、時ハ一部ヲ相添テ進呈ス

寫真術ノ必用ナルハ今更申述ズモ明ナリ殊ニ學術上實驗物ヲ精寫スルガ如キニ至ツテハ画工ノ筆尖ニテ漸ク之レヲ寫スガ如キハ時トシテ誤寫ナキヲ得ズ又不便モ少ナカラズ故ニ此ノ輕便ナル此速カナル寫真術ヲ應用セバ有益ナル可ラザルナリ唯ニ夫レノミナラズ地理絶景人物珍器等撮影スルハ有益ニシテ又無量ノ樂トナル可キナリ弊舖夙ニ感ズルアリ曾テ寫真即時傳習所ヲ設置シ深切簡易ニ其法ヲ教ユ蓋シ之レ一ツハ世ニ寫真ノ應用ヲ擴メ自ラ技術ノ進歩ヲ促ストニハ有益ニシテ面白キ此快樂ヲ速クモ江湖各位ニ知ラシメント欲スレバナリ

若シ夫レ器械ヲ購入セラル、アラハ無謝儀ヲ以テ即時傳授ス又遠隔ノ地ニシテ直接ニ傳授ヲ得ザルモノハ前記獨習書ヲ以テ之レニ代ヘ必ズヤ其方ヲ了得セシム可キヲ誓フベシ

東京淺草區並木町四番地

鶴淵幻燈舖

明治廿五年一月廿七日印
明治廿五年二月一日出版

東京淺草區並木町四番地

編輯兼發行者

鶴淵初藏

東京淺草區並木町廿二番地寄留

印刷者 宮部勘七

(浅草並木町 東京並木活版所印行)